

## 『差異と反復』における第三の時間への導入

三〇八

木村 春 奈

## 1. はじめに

ジル・ドゥルーズは、実存主義隆盛期に、ジャン・イポリット、フェルディナン・アルキエ等の下で研鑽を積んだ。以後、デカルトやヘーゲル等、いわゆるメジャーな哲学者からなる哲学史体系を逸れた哲学者の研究に着手し、独自の発想に基づく大胆な視角を投げかける。ドゥルーズ自身の思考をそれらの哲学者に伝播させる仕方、新たな展開を生み出していったのである。

1968年、国家博士論文となる『差異と反復』が世に出される。ここに初めてドゥルーズは独自の思索を結実させるのだが、デリダの名著『声と現象』<sup>①</sup>と共に〈ポストモダン〉の哲学と総称されることが多い。しかし、ドゥルーズの思索は哲学のカテゴリー化を問いに付し、哲学史全体を震撼させる強度を持つ。ドゥルーズを従来の哲学史に安易に囲い込むことは避けるべきだろう。

本発表で取り上げるのは、『差異と反復』における時間論である。この著作でドゥルーズは、「生成」・「多様体」・「差異」・「反復」といった様々な概念を創出していった。もちろん、これらすべての概念が彼の時間理解に基づくわけではない。しかし『差異と反復』の時間論は、ドゥルーズ中期の思想を読み解く上で欠かせない要所となっている。

ドゥルーズの時間論は、反復として習慣を形成する「第一の時間」か

ら「中間休止 (cesure)」としての「第二の時間」へ、そして差異そのものである強度としての、そしてタナトス (死への欲動) としての「第三の時間」に至りその完成を見る。本発表では、まず「第一の時間」から「第三の時間」へ向かう方途を明確にし、「第三の時間」のあらましを明るみに出す。「第三の時間」の成り立ちを、ドゥルーズの「差異」と「反復」という創造概念をもとに明らかにするのが本発表の目論みである。ドゥルーズによる概念の破壊と創造の力を借りながら、新たなドゥルーズ像を彫りだしていきたい。<sup>③</sup>

## 2. 第一の時間

## 2-1 「物質的反復」

「第一の時間」において「差異 (difference)」と「反復 (répétition)」は精神の働きと存在の仕方に関わる。といってもドゥルーズは「存在」から「?・存在」<sup>④</sup>の創造へ向かうのだが。しかしそれが「存在する」といわれる時の仕方を、我々は特に〈質料〉と呼ぶ。その理由は、イメージと結びついた差異の形態化へ向かう流動性を、現出する物質と区別するためである。ドゥルーズはこの区分を設けないが、本発表では議論の道

筋を明確化するため、「?・存在」に至るまでに「存在」を構成する生地を〈質料〉と表現したい。

「第一の時間」で問題にされるのは「物質的反復」である。ここで「反復」の概念に注意したい。「反復」は類似のものや等質的なものの単なる繰り返しではない。また、「反復は、反復する対象に、何の変化ももたらさないが、その反復を観照する精神には何らかの変化をもたらす」(DR,p96、以下強調は本文による)。「反復する対象」とは瞬間的諸事例、つまり「瞬間的精神 (*mens momentanea*)」である。「反復」は、精神を開く「差異」がそれ自身の結合原理によって融合し、新たな差異を生成させる時に生じる。その際、精神が同時に触発されて変化し、新たに生成した差異を観照・縮約する。ここに「反復」が形成され、対自 (*Pour Soi*) が出来上るのである。「反復」は、対象の自由な活動を拘束し、それを変化させるものではない。「反復」の開く新たな差異は、諸々の差異の結合に徹底して受動的だからである。しかし、新たな差異は、開かれるや否や、自らの〈傾向〉を展開して能動的な繰り返しを行う。成り立ちは受動的であつても、出来上がった差異はそれを形成する諸差異とは異なる独自の作動を繰り返るのである。これをドゥルーズは「能動的総合 (*synthèse active*)」と呼ぶ。

ドゥルーズは、「差異」が時間と空間そして精神を開くことを念頭に置いている。しかし「第一の時間」では、「精神」は差異によって開かれるや否や、差異を〈情感〉で満たすのである。これは、精神が能動的に働き、何かを創ることではない。<sup>⑤</sup>働いているのは差異なのだ。ここで我々は、第一の時間が「物質的反復」であることの理由を理解する。

「反復における不連続性と瞬間性の規則を定式化するなら、それは、(一方が消えてしまわなければ、他方は現れない)と表現するこ

とができる。瞬間的精神としての物質の状態がその一例である」(DR,p96)

差異が結合しなければ反復は形成されず、精神もまた結びあうことはない。また、諸瞬間は差異であるがゆえに共立しえず、一方が消えなければ他方は現れない。それは、まだ精神が観照せず、反復が形成されないことによる。ゆえに即自的反復とは、「瞬間的精神」による「物質的反復」なのである。

## 2-2・「第一の時間」の威力

ドゥルーズはヒュームを引用し、想像力が諸瞬間を縮約・融合して時間を形成すると述べつつ、時間の総合を遂行するのは精神ではないと言ふ。<sup>⑥</sup>諸瞬間とは差異であり、想像力は差異によって開かれた精神が受動的に帯びる力である。想像力を形成する差異は他の諸差異と結合・離反関係に入り、再び差異化され「内的な質的印象」<sup>⑦</sup>を形作る。それは、精神の想像的な観照のなかで (*dans*) 受動的に行われる。つまり、精神の想像力が差異の離反や連結から合成され、新たな差異が開かれるのに触発されて新たなイメージ (*image*) をもたらすのである。これが「受動的総合 (*synthèse passive*)」と呼ばれるものである。この時、諸瞬間が想像力の中で融合し同一化されても、諸瞬間は根底で自律を保っている。それゆえ、諸瞬間は精神の内包を希薄化したり、非概念的なイメージを反復したりできるのである。<sup>⑧</sup>諸瞬間の融合は新たな差異の生成でありながら自己同一化でもある。つまり、精神の〈自己同一性〉は存在論的ではなく、観照によるものなのだ。そうして精神は「自我」となり、己を「土台 (*fondation*)」とした現在の平面を形成するのである。

ドゥルーズはベルクソンの影響を強く受けながら、イメージという

言葉に多様な意味を含ませている。ここで使用するイマジユは、後述の「行動のイマジユ」のような生成そのものの直観ではなく、実体や存在の感受を含む静的なものである。ドゥルーズは「第三の時間」に至るまでは、減速した生成や行動の直観（表象も含む）一般をイマジユと呼んでいるように思われる。イマジユという概念はベルクソン同様、質料と結びつき存在論を射程に入れたものである。ドゥルーズはそれを他の概念とコラージュし、イマジユに様々な意味を帯びさせるのである。ゆえに、精神分析学の「潜在対象」「部分対象」といった概念はドゥルーズにとってイマジユであると考えてよい。我々は、解体を受けた後の「行動のイマジユ」とそれ以前のイマジユすべてにわたって、ベルクソンを継承したドゥルーズの概念としてイマジユを使用する。

### 2-1-3・〈傾向〉<sup>⑨</sup>・「習慣」・「反復」

「第一の時間」において、精神の働きの仕方を〈傾向〉と呼ぶならば、「反復」は〈傾向〉を促し、習慣は〈傾向〉が拘束していく質料性である。「反復」において精神が変化＝差異化する時、精神は自己の〈傾向〉に沿って差異化を遂げる。〈傾向〉は精神の働きの仕方を指し、差異の結合原理とは独立のものである。〈傾向〉には精神の〈情感〉が着生し、独自の働きを為すのである。ひとつたび生み出された差異は、一貫して自発的・能動的にその差異を繰り広げつづける。〈傾向〉とはこうした差異の繰り広げの原理であり、差異の連合原理によって裁ち直されつつ、自らを繰り広げて自己差異化する精神の働きの仕方なのである。精神は結合原理を受動的に生きながら、そこから生まれる新たな差異の〈傾向〉を能動的に展開している。

この〈傾向〉が、我々の存在の仕方である質料性を拘束し、習慣を形成する点に注意したい。ここで、「反復」・「習慣」・〈傾向〉を厳密に区別

すべきであるだろう。「反復」は差異の結合原理と、そこに開かれる新たな差異の自己差異化との間の、漸進的変化を表す。他方〈傾向〉は、開かれた差異の繰り広げの仕方である。「習慣」は、精神を形成すると同時に精神に形成されもする質料の形態化である。

「習慣」の形成には精神の〈自己同一化〉の働きが関わる。しかし、それをなすのは「崩壊した自我のシステム (system du moi dissous)」<sup>⑩</sup>である。「第一の時間」において、自我は最初から崩壊している。というのも自我とは、受動的な差異の結合から生まれた差異の自己展開であり、自我は実体的な中心を持たず、諸々の差異の結びつきに依存しているからである。それは、一つの自我の中央集権的なシステムではなく、中心化のなされていない複数の自我の連関である。このようなシステムに見出される習慣と自我、そして質料との関わりは、どのようなものなのか。

### 2-1-4・習慣と自我、そして質料

自我は精神による〈自己同一性〉の観照であり、自己自身の反省である。しかし、観照自体が差異化である以上、自我は常に自己中心化から逃れる。自我の観照する〈自己同一性〉は想像であり実在ではないのだ。それゆえ、自我はすべて「幼生の主体 (sujet larvaire)」<sup>⑪</sup>、すなわち脱中心化され、生まれ出ようとしては流産する自我なのである。

このような自我の観照とは、つまるところ差異の自己展開である。ドゥルーズの言う〈差異の抜き取り〉<sup>⑫</sup>とは、この差異の自己展開の中で、己を巻き込む他の諸差異を問いに付し、自らを繰り広げる差異の作動を指すのである。

こうした自我の観照が「習慣」を形作り、自我自体が習慣であると同時に習慣をつける。「習慣」とは、差異によって〈何ものか〉を創りだすことなのだ。つまり「習慣」は、「反復」の持続の顕現であり、質料を拘

束し形態化する働きなのである。形態化であるがゆえに「習慣」は、中心を持たない崩壊した自我でありつつ、差異（新しいもの）を様々な変容として内部に組み込み、それを「自我 (moi)」という〈何ものか〉に関係づけることができるのだ。差異が一つの運動として浮かび上がり、「自我」と名付けられるのである。

「自我は様々な変容を持っているのではなく、それ自体が一つの変容なのである。」

このように、「習慣」は虚構の中心である「自我」と同時に実在的な現在平面の質料性を形作る。

## 2-5・「第一の時間」と現在

「第一の時間」は、想像的な精神の中で、各々の瞬間的精神の結合原理による精神の固定化と、それにより新たに織り上げられた精神の開示による情動的な偏向との、互いの織り込みあいであった。<sup>⑬</sup>

このとき結合される瞬間的精神も、新たに開かれる情動的な精神も、共に差異である。ここで重要なのが、差異の不等性と〈傾向〉である。差異はこれにより、過去から未来へ向かい、個別的なものから一般的なもののへ向かうように仕向けられる。不可逆的な時間の矢は、すでに差異そのものに宿っているのだ。それゆえ、「第一の時間」は〈現象学的時間〉つまり〈反省〉に基づく時間ではない。差異が不等な時間を配分し、現在という平面へ縮約することで、時間の矢を個別的なものから一般的なもののへの移行と見なすのである。<sup>⑭</sup>

こうしてできた現在の平面は「習慣」と密接にかかわり、「土台」としての時間を構成する。現在の平面は、観照―縮約という差異化に着生する

イマージュ(質)である。この、差異に着生する「質」の領土 (territorialité)<sup>⑮</sup>、動く平面こそ「習慣」なのである。

## 3・第二の時間

### 3-1・土台と根拠 (fondement)

土台とは差異の〈傾向〉の繰り広げによる平面の創設である。しかし、各々の差異の根底にある差異化をなす流れ<sup>⑯</sup>そのものが出現し、諸々の差異を従える状況に至る。それが「第二の時間」を形成する時間の「根拠」である。

「第一の時間」から「第二の時間」への移行。ここにおいても、「意志」などの介在を想定する心理主義的な解釈は避けるべきである。観照する精神が意志して、自らの変化を促すと考えるべきではない。この移行は、〈行動を創る時間〉と〈行動する時間〉が等しくなることである。<sup>⑰</sup>〈行動を創る時間〉とは連結する諸差異であり、〈行動する時間〉とはこの結合により新たに開かれる差異の自己差異化である。「第一の時間」において両者は不等であり、特に観照する自己差異化を、無意識的・受動的な諸差異の野性の結合原理が圧倒していた。

「イマージュにおける行動がその時間においては「私には大きすぎる」ものとして定立される、といった「第一の」時間が、実際、いつでも存在する。」<sup>⑱</sup>

「第二の時間」においても「能動的総合」は「受動的総合」に依存している。しかし同時に「受動的総合」から、それ自身の〈傾向〉を展開す

る「能動的総合」が差異化される。これが「力＝累乗 (puissance)<sup>⑨</sup>」と呼ばれる事態である。これにより、「受動的総合」と「能動的総合」は等価となり、互いに貫入しあう。つまり、引き受ける差異と繰り広げる差異が一体化し、差異化の〈傾向〉が未決定になるのである。〈傾向〉を見失った差異は瞬時に休止する。これが「中間休止 (cesure)<sup>⑩</sup>」である。

差異化の〈傾向〉が未決定となる以上、差異は弛緩し解体される。このとき、差異の無限の解体可能性として後退性の〈無底 (sans fond)〉が示唆される。しかし同時に、未決定となった差異の漸進的な差異化の流れもまた出現する。この流れは、差異の〈傾向〉が未決定であるがゆえに、各々の差異が識別されえず未分化となるが、〈傾向〉自体が破壊されたのではないので、未分化の差異が差異化の〈傾向〉を発動することによる。この後退と漸進の混成こそ、時間流を形成する条件、すなわち「時間」の「根拠」なのである。それは高所に立って各々の「受動的総合」すなわち「土台」と接合し、その生成に関与する。これこそドゥルーズが「純粹過去」もしくは「純粹記憶<sup>⑪</sup>」と呼ぶものである。

### 3-2・純粹過去のパラドクス

純粹過去には四つのパラドクスがある。過去は、現在と同時に過去であること。過去自体は過ぎ去らないし、到来もしないこと。過去は存続し (insiste) 存立し (consiste) 存在する (est) ということ。過去は、過ぎ去る現在に先立って前存 (prexiste) していること<sup>⑫</sup>。

「純粹過去」は、爆発的・分裂的で〈無底〉へ通じる「部分対象 (objet partiel)」と、未分化で液体的な流体としての「潜在対象 (objet virtuel)」の混成である。それゆえ「純粹過去」は全体的な対象を志向しつつ、その不可能性の証示の中でしか存在しえないのだ。

「純粹過去」は無数の差異からなる地層であり、差異はそれ自体差異化

する。しかし「純粹過去」は、この差異化が未決定となる「中間休止」の状態なのであった。この時「純粹過去」は、時間流により差異を裁ち直して「部分対象」となし、「純粹過去」の全体化の志向の一端を引き受けるものとする。全体化の志向は、それを折りこんで作動するのである。それゆえ、「純粹過去」は不動の動者であり、「過ぎ去らないし、到来もしない」ですべてを動かす。そして全体化の志向は現在化と折り重なり、過去を現在へ向けて縮約しつつ、現在化を繰り広げる差異を規定し、現在と過去とを同時に存在させる。にもかかわらず、過去は時間を可能にする時間自身の存在であるがゆえに現在化されず、潜在的・即自的存在となるのである。最後に、過去自体が、現在を到来させつつ過ぎ去らせる現在化なのだから、過ぎ去る現在に先立ち、前存しているのである。

### 3-3・「第二の時間」の直立

「純粹過去」は、高所に直立して各々の差異を裁ち直し、全体化へ向かう。直立がなされる理由は、「受動的総合」の変質にある。

「第二の時間」の「中間休止」により、「第一の時間」で「受動的総合」を支えていた多様な差異が解体し、それらを〈無底〉へと吸引する「死の欲動 (thanatos)」と漸進性の「生の欲動 (eros)」が同時に発動する。それにより「過ぎ去らせつつ到来させる」時間流が「根拠」となり、諸々の「受動的総合」を裁ち直して新たな「受動的総合」をもたらす。それは、未分化の差異の漸進的な差異化の遂行であり、全体対象つまり「潜在対象」への分化の志向である。このイメージが高所に赴き、「虚焦点 (foyer virtuel)」を形成するのである。それは「過ぎ去らせつつ推し進める」という「時間」のイメージであり、諸々の「受動的総合」すなわち「部分対象」を統括する。後退と漸進の接合は、時間自体が「純粹過去」として高所に超越することである。こうして「第二の時間」では、

「受動的総合」は「記憶に属するいつそう深い受動的総合」<sup>23</sup>となる。「受動的総合」は遍在する差異でありながら、一挙に行われる全体的な差異化を發動させる部分となるのである。

「第二の時間」は、イマジニが受動的でしかなかった「第一の時間」をのりこえ、イマジニと行動の等しい時間を創り上げる。「第一の時間」ではイマジニが行動によって超えられていたが、「第二の時間」では行動によるイマジニの超越をイマジニ化 (imagination) する垂直の観照が立ちあがり、行動を限りなくイマジニに囲い込むのである。行動とは時間の総合であり、それをイマジニ化するには部分的なイマジニを虚の焦点で支える他はない。そのため、「部分対象」は「潜在対象」となり、常に自己の半身を追い続けるようになるのである。

### 3-4・「第二の時間」とエロス

「純粹過去」がエロスとタナトスとの混成だとしても、時間の総合の中でエロスやタナトスが各々に時間を従えていく仕方こそ、その發揮を表すことになる。「第二の時間」は、反復を形成する差異の支配的な速度を受け入れ、反復の自己循環を可能にする点で、エロスの総合の時間である。

「純粹過去」の直立とともに「潜在対象」<sup>24</sup>が原光景 (scene) として開かれ、現在化の作動はそれをめぐり過去と現在を循環することになる。「純粹過去」は諸差異の地層であり、現在は、差異化を繰り広げる規定された差異である。現在は常に過去に向かって超越しながら「純粹過去」の潜在的差異を横断し、引き裂かれている。しかし同時に、これら断片的差異を流体のように浮かべる未分化の差異が触発され、各々の差異の縮約と配分を命じる差異化が發動する。虚焦点と同時に「潜在対象」が原光景としてあらわれ、それに沿って過去は諸々の差異を現在へ縮約し、

現在は再び自己へと回帰するのである。

「第二の時間」は「自己同一化」という幻影へ向かうエロスの時間であり、常に差異を覆う仮面つまり「潜在対象」を必要とする「偽装」である。「第二の時間」は、自己を差異化しつつ一体化しようとするそれ自身の成り立ちを超えることがないのである。

## 4・第三の時間

### 4-1・「第二の時間」から「第三の時間」へ

「第二の時間」は「中間休止」そのものを指す時間である。しかし、未だイマジニが「潜在対象」という仕方では差異を覆っていた。「第三の時間」は、このイマジニそのものを解体する。その後に見れるのは、差異それ自身、すなわち「強度 (intensity)」である。

「第二の時間」で、現在と過去を循環させる蝶番 (cardo)<sup>25</sup>の役割を果たしていたのは、「潜在対象」であった。しかし、過去の縮約による差異と現在の自己差異化による差異とが釣りあい、円環は解体する。ニーチェの『ツァラトゥストラ』にちなんで「大いなる正午」と呼ばれる瞬間である。

それは、「純粹過去」の差異の縮約を規定する諸々の差異の配分と、縮約された差異の自己差異化を可能にする差異の配分とが等しくなる「時」である。つまり、「純粹過去」の周りを廻っていた「受動的総合」と「能動的総合」が再び一つになるのだ。これにより「潜在対象」つまりイマジニが解体し、「中間休止」それ自体が剥き出しになるのである。

「中間休止」が生成変化を頭にし、その速度を支配的に生かすことが可能になるという意味で「第三の時間」は行動の時間である。それは、観

照によって行動を作ることでも、差異の配分に従って行動することでもない。「第三の時間」は、時間の生成をそのまま行動とする時間なのである。

#### 4-2・「行動のイメージ」

「中間休止」が剥き出しになることで自我は解体され、差異を覆っていたイメージ化の働きである精神もまた解体される。差異は根底から変革され、純粹にそれ自身となる。

「中間休止」による〈自己同一化〉の解体は、自我のナルシズム的な回路の解体であるがゆえに、自我をも崩壊させる。そこに現れるのが「能動的ではあるが、ひび割れた『自我』(Je-fais)<sup>32</sup>」である。「ひび割れた自我」には、もはやそれを統べるイメージ化は働いていない。それゆえ、イメージを繰り広げていた「受動的総合」／「能動的総合」という区別も失われる。自我やイメージの条件であった差異の〈傾向〉にもひびが入り、砕けるのである。「ひび割れた自我」とは、自我を自我とするあらゆる差異化それ自体のひび割れなのだ。ここでドゥルーズは「行動のイメージ」<sup>33</sup>に言及する。

「時間の総体は、超自我 (surmoi) によって同時に提示され禁止され予言されるような途方もない行動のイメージ、すなわち〈行動Ⅱ x〉のイメージの中に取り集められる。」<sup>34</sup>

「行動のイメージ」は観照されるイメージではない。これは、観照に依らず、差異をそのまま観取するイメージである。「超自我」とは、名もなく形もない純粹な命令である。それによって「第三の時間」は「提示され禁止され予言される」のであり、その観取が「行動のイメージ」

なのである。「超自我」は〈自己同一性〉を奉じるイメージの最後の姿であり、それが禁じつつ予言したものを「超自我の予言を成就する〈後〉という様態で反復」する。この〈反復〉は、「第一の時間」や「第二の時間」のように〈傾向〉に沿って差異を繰り広げる反復ではなく、一回の出来事が無数のシミュラクル (simulacre) に差異化される「n乗する〈反復〉」なのである。

#### 4-3・「第三の時間」とタナトス

「第三の時間」はタナトスに従う時間である。「第三の時間」では、決して自己を回帰させることのない直線の時間を従えるものとしてタナトスが繰り広げられる。

「第二の時間」はすでに「中間休止」であり、「強度」が出現する条件は整っていた。しかし、差異化の〈傾向〉を破壊しないまま、「差異」と「反復」を編成し直したため、大規模な全体化を目指す自己回帰の回路となった。

しかし、この循環を駆動するエロスを休止させる〈大いなる正午〉が到来する。二つのセリーを駆動させ、統合的なイメージを投じていた過去と現在の循環は、両者が一体化することで崩壊し、垂直的な統合の不可能性が露わになる。この不可能性の露呈は、方向そのものの解体である。漸進・後退といった方向、つまり「時間の矢」すら失われる。

しかしそれは、観照的なイメージに覆われない純粹な差異の到来により、「強度」が初めて見出されることを意味する。「強度」とは差異の強さであり、「差異」とは「差異化Ⅱ微分化 (differentiation)」しゆくものである。ここでタナトスが、方向を主とする基数に代わり、順序を主とする序数を打ち立てることに注意したい。「第二の時間」においてタナトスは、イメージを形成する静的で自己循環的な差異の速度に抗い、

無限後退へ自己解体していく欲望 (*desire*) であった。しかし「第三の時間」では、差異を支配する速度に亀裂を入れ、無限に多様な速度をそこから解放的に導き出す肯定的欲望に生成する。タナトスは、支配的な速度を基に(基数) 差異の配分を促すエロスを断ち切り、差異の生起する事実的な順序のみを問題にして(序数) 速度を解放するのだ。こうして新たなものの展開が可能となるのである。

各々の差異は互いを巻き込み消去する可能性を孕むが、「第一の時間」のように共立不可能な差異を打ち消すことはない。「第一の時間」では〈傾向〉により差異の速度が固定化されていたため、速度の共立不可能性は共生の不可能性にまで至っていた。しかし「第三の時間」では、差異の速度の解放から必然的に多次元世界が生成するがゆえに、共立不可能な差異の共立が可能となるのである。<sup>③</sup>

#### 4-4・直線・「セリー (serie)」

「第三の時間」を代表する概念は「セリー」である。それは直線の時間であるとも言われる。「第三の時間」では、〈自己同一性〉に還元し得ない「セリー」の概念が必要になるだろう。「セリー」とは、時間の直線的な表象から区別される差異の力動的な「強度」の生成の表象であり、異質な時間・空間を同時に可能にするものである。

「第三の時間」では、差異は不等なまま〈前・後〉つまり過去・未来に開放され、互いに巻き込みあいながらもどこまでも離散 (*diaspora*) する。それゆえ、差異は無限に差異化して互いを繰り広げようとし、共立不可能となる。この共立不可能な差異を配分するのが「強度」である。「強度」は、互いに異質な差異の無限の自己差異化すなわち細分化であり、同時にそれらの差異の不協和から新たな差異を開く「異化」分化 (*differentiation*) の原理でもある。「強度」から〈前・後〉に割り振られ

た差異は、割り振る「強度」とは異質なそれ自身の「強度」を持ち、各々の差異の特異性を繰り広げつつ、互いの自己差異化と同時に「強度」の合成へと向う。「異化」分化」とはこの合成であり、生成する「セリー」のあらゆる差異の速度を俯瞰し、「セリー」の形となる新たな強度を生み出すことである。それは、相反する差異が互いを開放しあい異質な差異へ己を細分化する「差異化」微分化」と同時に進行する「一義性 (*univoque*)」の原理なのである。「異化」分化」／「差異化」微分化」の原理は、ベルクソンの『時間と自由』における「純粹持続」の概念から多くの着想を得ている。「第三の時間」はこの意味で、「第二の時間」以上にベルクソンの時間理解であると言える。

こうして諸々の差異は己自身を開放しつつ、「強度」の線である「セリー」を形作る。この線をドウルーズは「直線」と表現する。前と後に差異化されているがゆえに不連続な各々の差異は、無限に差異化と異化を繰り返し、それが未来と過去という分裂した直線を形成する。文字通り未来と過去にまっすぐに延びた線であり、しなやかで動的な形を失うことのない線。共立不可能な差異の共立可能性を示すがゆえに、「一義的」と呼ばれうる線。この動的な線の形こそ「強度」なのである。

この時我々は、もはや能動性を表象するのではない。我々は、真に能動的になったのだ。というのも、差異と一つになり「強度」という差異の形を〈私は感じる (*Je sens)*〉<sup>④</sup> 事が、その動きそのものを生きる能作となるからである。これが「第三の時間」で最後にドウルーズが言わんとしていたことではないだろうか。

#### 5・おわりに

以上が、「第一の時間」から「第三の時間」に至るまでの推移である。



ドゥルーズはその間、多くの哲学者や精神分析学者に言及するが、彼らはパッチワークのように繋がれてゆく。ドゥルーズ研究とは、このパッチワークに参加していくべきものであるかもしれない。

その意味で、ドゥルーズの思索は正当な道筋など提起しないものだろう。決して差異の配分を支配する収斂へむかうことは無く、差異から生成し再び差異へと戻っていく、無限に解放された一義性。それが本発表で示した「第三の時間」の姿である。

「第三の時間」については、未だ導入としてしか触れることはできなかった。それ自身の解明は稿を改めて論じることにはしたい。

## 注

- ① Jacques Derrida, *La voix et le phénomène*, puf,1967.
- ② ドゥルーズの仕事は、初期・中期・後期に大きく分けられる。初期は独自の思索の展開というよりも、様々な哲学者の独創的な解釈がほとんどである。例としてヒューム論の『経験論と主体性』、ベルクソン論の『ベルクソニズム』等がある。ドゥルーズが自らの思想を展開し始めるのは中期以降で、その第一作が『差異と反復』であった。中期に位置づくものはこれを含めてフェリックス・ガタリとの共著『アンチ・オイディプス』等がある。明確な区分はできないにしても、『差異と反復』以降、ドゥルーズはある時は単独で、ある時はガタリやクレール・パルネ等と共闘しながら、新たな思索の展開へ分け入っていった。
- ③ 既にドゥルーズの『差異と反復』における時間論の先行研究として檜垣立哉の『永遠と瞬間』(岩波書店,二〇一〇年)がある。「第三の時間」について集中的に論じられており、本論もそれを参照している。ただ、本論で重視するのは「第一の時間」から「第三の時間」までの方途であり、檜垣の著述と視点のずれが生じている。この点に注意されたい。
- ④ Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, puf,1968 (以下略号DR), p.265. 虚辞のNEが否定を表すものではないという議論から「(非)ー存在(non) -être)」「(非)ー存在(?-être)」を導きだすこの個所は、短いながら

「存在」を解体する注目すべき概念創造が行われている。

- ⑤ ドゥルーズは心理主義を注意深く退けている。ドゥルーズを論じる際に精神や意志の力による創造を志向することは避けるべきである。
- ⑥ DR,p.97.
- ⑦ DR,p.97.
- ⑧ DR,p.22-25. 「概念の自然的阻止」における「超越論的論理学」参照。
- ⑨ ドゥルーズ初期の著作『経験論と主体性』以来、「ベルクソン、1859-1941」「ベルクソンの差異の概念について」(無人島 1953-1968)河出書房新社 二〇〇三年所収)等において頻出する概念。因果性を退け、目的-原因連関ではなく、因果性の機能を果たしつつそこから少しはみ出た変則性を持つ準-因果的(*quasi cause*)な働きを表現するために用いられる。「差異と反復」の時間論ではあまり使用されないが、議論の展開上、(傾向)を考慮しつつ分析する必要があるため導出した。
- ⑩ DR,p.107.
- ⑪ DR,p.100.
- ⑫ DR,p.107.
- ⑬ 結合原理とは、ドゥルーズの言う「連合主義」を指す。ドゥルーズは、ベルクソンもまたヒュームと同じくこの原理に行き当たり、ヒュームの分析を取り戻している点を贅えている。DR,p.98.
- ⑭ DR,p.97.
- ⑮ 『アンチ・オイディプス』でドゥルーズが初めて提起する概念(Gilles Deleuze & Félix Guattari, *Anti-Édipe, Minuit*, 1972, p.375-378. 以下略号AGE)。しかし『差異と反復』ですべてに「土台」を土地と関連付けた記述がみられ、後の「領土」との関連を垣間見ることができると。
- ⑯ これを『意味の論理学』や『アンチ・オイディプス』を先取りして「充実身体」あるいは「器官なき身体(CsO)」と呼ぶこともできるだろう。
- ⑰ DR,p.146.
- ⑱ DR,p.120.
- ⑲ DR,p.128.
- ⑳ H・ヘルダーリンの詩論『オイディプス註解』・『アンティゴネ註解』

で使用される、劇の筋の流れの区切りを表す語。ヘルターリン自身、前と後の配分という時間的意味合いを含ませており、ドゥルーズはこれを利用して時間論を展開する。「第三の時間」の導入部で使用されることは周知だが、すでに「第二の時間」が「中間休止」それ自体であることをドゥルーズは指摘する。それについては後述する。

②1 ベルクソンの『時間と自由』・『物質と記憶』などから多大な影響をうけて創造された概念。同じくベルクソンから影響を受けているメルロ＝ポンティにも見られる。しかし、メルロ＝ポンティの「根源的過去」と同じものではない。それについては、稿を改めて論じることにした。

②2 DR,p.110~p.112.

②3 DR,p.108.

②4 DR,p.136.

②5 エロスとタナトスはフロイトにより打ち立てられた概念だが、ドゥルーズは、それに独自の解釈を施している。

②6 「潜在対象」は「対象 $\equiv x$ 」と同義である。虚焦点によって支えられ「純粋過去」により無意識的に形成される時間の潜在的イマジユである。実質的には「部分対象」と同じく断片的だが、時間の流動性のイマジユであるため、虚焦点を伴うと全体的な対象を虚的にイマジユするようになる。

②7 支配的速度の中での差異の縮約は、差異が己の速度を自由に展開する「第三の時間」における強度の合成とは区別されるべきものであり、異化 $\equiv$ 分化と似て非なるものである。

②8 DR,p.121.

②9 Charrier とするのが一般的だが、ドゥルーズは序数 (ordinal) と基数 (cardinal) との差異を意識し、蝶番を表すのにあえて *cardo* とした。「第二の時間」は基数的な時間なのである。序数は「第三の時間」を表す数として使用される。

③0 DR,p.146.

③1 DR,p.146.

③2 DR,p.146.

③3 ドゥルーズは強度を差異と同一視する。

③4 「共立不可能なもの共立」はライブニッツからの引用だが、ドゥルーズは差異の不協和が生み出す差異の生成における「共立不可能なもの共立」を示そうとしている。

③5 AGE,p.25~26: 『アンチ・オイディプス』において重要視される表現だが、『差異と反復』の特に「第三の時間」以降の議論にあてはめることができるものと判断し、使用した。

(本学大学院博士後期課程)